

「連帯の40年」発刊に当たって



アジア連帯委員会
会長 澤田 和 男

アジア連帯委員会（略称C S A）は、1981年4月16日に「インドシナ難民共済委員会」として発足し、その後活動内容の変化に伴い3度名称変更して現在に至り今年で結成40年を迎えることになりました。今日までの長きにわたる皆様方からのご支援ご協力に改めて心から感謝申し上げます。

本来ですとこの40周年を記念する行事を支援していただいている諸団体や個人の皆さま、関係する皆様と開催し喜びを共有したいところですが、2019年年末に中国武漢で発生した新型コロナウイルスによる感染が未だ収まっておらず、大勢の皆さんを集めての祝賀行事は開催しないこととしました。

しかし、創立30周年以降10年間のC S A諸活動を取りまとめた「連帯の40年」を発刊して記録に残すこととしました。

ベトナム戦争の終結と軌を一にして発生したインドシナ難民の救済を目指して、1981年の結成から今日に至るまでの40年間、この活動を推進してこられた諸先輩方のご努力と熱意に心から敬意を表したいと思います。またこの諸先輩方の志に共感し、具体的な支援を継続していただいた諸団体・個人の皆様方に心から感謝したいと思います。

とりわけ、支援の中心的な役割を、結成時の同盟から連合が引き継いでおり「愛のカンパ」からの多大なご支援や役員の派遣など、多大なご貢献をいただいていることに感謝します。

C S Aは「インドシナを中心としたアジア諸国の人々の人権を守りその自立を促進するとともに、貧困や多くの問題を抱えているアジアの人々と連帯し、生活と福祉の向上をはかること」という目的達成に向け、この10年間は従来に引き続き①救援衣類を送る運動、②ラオス初等教育の改善（小学校建設・補修活動）、③ラオス高等教育の改善（サンティパーブ高校生寮支援）を主要な取り組みと位置づけ積極的な運動を展開してきました。

この3つの主要な取り組みについて簡潔に触れます。

その一つは、救援衣類を送る運動です。1981年から取り組んでいるこの運動では、毎年集約された善意の救援衣類を、タイ・ラオス両国政府の要請に基づき必要とする人々に配布し、関係者から感謝されています。

課題としては、将来支援対象国をどう見極めていくのか、当面の輸送費の増加にどう対処していくのかということです。また、直近では新型コロナウイルス禍で救援衣類の集約や輸送が困難となっていることです。

その二つは、ラオスでの小学校建設運動です。1995年の第1校目建設からこれまでに小・中学校24校を建設し寄贈してきました。また、古くなった寄贈した校舎を父兄の労務提供も求めながら計画的に補修しています。新たな校舎建設・寄贈は、2015年以降できていませんが、現地から要請があった学校での補修工事は継続して実施しています。

今後必要な補修を行う一方、新たな校舎建設・寄贈に向けた検討が必要です。また、ラオス政府には、将来に向けて義務教育の実施に不可欠な学校整備を求めていきます。

その三つは、サンティーパープ高校生寮支援の運動です。2002年に高校生寮を建設・寄贈するとともに、そこでの生活と学業を支援することにより、貧困などの事情によって進学が困難な生徒が高等教育を受けられることを可能にしています。現在の寮生は90名、これまでの卒業生は480名に達し、総じて優秀な成績で日本への留学も果たすなど国を支えるリーダーとして成長しています。

今後もこの支援を続けるとともに、ラオス政府や学校関係者に対しては自主運営の実現を求めていきます。

このように、主要な活動は幾つかの課題を残しつつも、連合・各会員団体・個人会員の皆さまの心温まるご支援ご協力により、大きな成果をあげることができました。ここに改めて感謝とお礼を申し上げます。

終わりに、この意義ある40周年を契機としてCSAの運動がますます発展できるように、連合・会員団体・個人会員の皆さま方の積極的なご支援ご協力を心からお願い申し上げ「連帯40年」発刊にあたっての挨拶といたします。

アジア連帯委員会（C S A）結成40周年あいさつ



日本労働組合総連合会
会長 神津 里季生

アジア連帯委員会（C S A）が設立40周年を迎えられたことに際し、心からお慶び申し上げます。また、平素から連合運動に対し、ご理解・ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

前進である「インドシナ難民共催委員会」が1981年に設立され、草創期からラオスおよびタイへの救援衣類を送る運動を継続されるとともに、1995年ラオスの第1校目建設以降、24校もの小中学校を建設・寄贈されるなど、教育面での支援活動にもご尽力されてきたことに、心から敬意を表します。

C S A加盟団体も今日現在71団体を数える規模に発展しています。労働運動を中心とした社会連帯の広がりや、支援先の国々はもちろんのこと、支え合い助け合う社会基盤の拡充の観点からも貴重な運動であります。

C S Aの活動の特徴は、救援衣料をおくる運動においては、職場や地域において仲間の一人ひとりが参加する草の根運動であること、そしてワーキング・スタディツアーを通じて、小学校の建設や高校生寮支援の現場を視察し、子どもたちや高校生などとの交流を通じて、支援が届いている様子や感謝の声などを受け止め、運動の参加者にフィードバックするなど、体験を通じた成果と課題の共有にあると考えています。

こうしたC S A運動への参加は、社会貢献の側面のみならず、運動を通じた人材育成にも繋がるものであり、労働組合をはじめ参加の各組織・団体にとっても貴重な機会になっているものと認識しています。

さて、2019年末に始まった新型コロナウイルス感染症は、世界中に拡大し私たちの暮らしを一変させました。このC S Aの運動においても大きな影響が及んでいるとお聞きしています。他方で支援先の国々においては、これまで継続されてきた支援領域に加え、新たなニーズへの対応も必要になってきていると思います。限られた運動資源の中にあって、支援国の良き相談相手として必要な取り組みを展開され、これからも期待に応え続けて頂きたいと願います。

連合は、C S Aとは、連合結成以来、1990年に「連合・愛のカンパ」を立ち上げた時から支援させていただいています。連合がめざす「働くことを軸とする安心社会」に共に取り組む仲間として、今後とも友好関係の発展に積極的に関わり合いを深めたいと考えています。

結びに、結成40周年を機に、C S Aの益々のご発展を祈念しご挨拶とさせていただきます。

C S A 設立40周年おめでとうございます



タイ王国社会開発福祉省
福祉局長 スーチ ジャンタオン

タイ社会開発福祉省を代表して、40年間長きにわたり人道支援と奉仕を行ってきたアジア連帯委員会の設立40周年心からのお祝いを申し上げます。

また、これまで貴委員会からの支援を受けてきたタイの困窮者の人々になりかわりまして心から感謝の意を表します。

1992年から毎年寄贈頂いている救援衣類は、社会開発福祉省のバンコク倉庫に引き取り、この倉庫で衣類の分類・仕分作業を行った後に、タイ国内各地の困窮者支援センター等に送付します。そして、その地域の村長・地区長から寄せられる配布要請の中から、緊急性などの優先順位を定めて有効に配布されています。C S Aを通じて救援衣類を送って頂いたすべての日本の皆様に心からお礼を申し上げます。

C S Aの設立40周年に際し、重ねてこれまでのご支援の感謝申しあげますとともに、貴委員会の今後ますますのご発展と皆様のご多幸を祈念申し上げお祝いのメッセージと致します。



C S A 設立40周年祝辞



ラオス人民民主共和国
教育・スポーツ省
総合教育局長
シーソク ボンビッチ

ラオス教育・スポーツ省を代表して祝辞を送ります。C S A の設立40周年おめでとうございます。

教育スポーツ省の初等教育責任者の立場から感謝と、そしてC S A が寄贈・建設して下さった24の小学校校長・先生・生徒・父兄会になりかわりまして、これまでのご支援に心から厚くお礼申し上げます。貴委員会により建設された小学校ができたことにより、山間部や過疎地の多くの子供達が学校で勉強ができるようになりました事は、C S A の支援がラオスの教育向上に多大な貢献を果たされてことは明確でありまして、感謝と最大の敬意を表します。

また、初等教育のみならず中高教育の支援につきましても、ラオス北部のルアンプラバンにある国内有数の成績優秀校でありますサンティパープ高校に、2002年C S A は寮を建設して下さいました。そして現在も寮運営の全面的な支援を継続していただけていますことも、深甚の感謝を申し上げます。

設立40周年に際し改めて、これまでのご支援に重ねてお礼申し上げますと共に、今後ともラオスの教育支援につきまして引き続きよろしく願いいたします。



アジア連帯委員会40周年を祝して



ラオス人民民主共和国
保健省 官房長
ソムチット フェブライ

まずはじめに、ラオス保健省を代表しアジア連帯委員会・会長・役員、そしてC S Aのすべてのメンバーに、C S Aから毎年贈って頂く救援中古衣類の支援を受けたラオスの最貧層・困窮者・被災者になりかわりまして、心から敬意と感謝を申し上げます。

1999年以来C S Aの支援は、ラオスの困窮する人々への救済に大きく貢献してきました。山間部等の貧しい家庭の子供たちは、暖かい服を着て冬の間も学校に行くことができ、また高齢の人々は日本の質の高い衣類が送られてくることを待ち望んでいます。ラオスは未だ多くの国民がC S Aの継続的なサポートを受けることを楽しみにしているのが実情で、支援の継続を必要としています。

ラオス保健省はこれからもC S Aとの連携を強化して、国民の幸福が増す努力を致します。どうぞ今後ご理解ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

C S Aの40周年を心からお慶び申し上げ、C S Aが今後ますますご発展することを願っております。



アジア連帯委員会（C S A）40周年記念誌に寄せて

「在日ベトナム人コミュニティの今日の問題解決に過去の教訓を生かしたい」



日本在住ベトナム人協会
会長代行 南海泰平

アジア連帯委員会（C S A）が設立40周年を迎えられましたこと、心からお慶び申し上げます。この機に、日本在住ベトナム人協会（V A J）を代表して、平素、C S Aの皆様より暖かいご指導・ご支援を賜りましていること、深く御礼申し上げたいと思います。

40年前のことを思い出しますと、C S Aの前身である「インドシナ難民共済委員会」は「難民と難民が助け合い、その助け合いを日本人が助ける」という『難民共済』のことをモットーとして1981年に発足し、東南アジア諸国の難民キャンプに古着や本等を送る運動を進めました。私は当時、大学院生でしたが、このモットーに共感し、他のベトナム、ラオス、カンボジアの友人と一緒に同委員会に参加しました。そして、1983年に、同委員会が「インドシナ難民連帯委員会（C S I R）」と改名、在日インドシナ難民を対象に支援活動を本格的に始めた時、偶然にも私は大学院修士課程を終了しました。大学の先生が推薦してくれた会社に就職するかどうか悩んでいましたが、C S I Rの矢田彰事務局長の進言を頂き、C S I R事務局の皆さんと一緒にフルタイムで難民救援活動に参加することにしました。

当時の状況をおさらいしますと、1970年代後半には、「外国船に救助されたベトナム難民（ボートピープル）が日本の千葉港に運ばれてきた」等というニュースが毎日マスコミで報道されました。日本政府は仕方なくこれらボートピープルに一時上陸許可を与え、日本各地にある慈善団体が運営する難民キャンプに収容してもらうこととしました。当時、日本にいるベトナム人留学生は700人ほどいましたが、このうちの数十人は、法務省出入国管理局に頼まれて難民の上陸に係る手続きを通訳者として手伝うか、カリタスジャパンや立正佼成会、赤十字社等の慈善団体が運営する難民キャンプのアシスタントとして働いていました。この数十人のベトナム人留学生は当初、それぞれの事情で難民救援活動にかかわりましたが、やはり徐々に互いに力を合わせる必要があるという認識で、1977年に「在日自由ベトナム人総会」を結成しました。これは「日本在住ベトナム人協会（V A J）」の前身でした。

「在日自由ベトナム人総会」はベトナム人留学生と宗教関係者だけをメンバーとして発足したためか、力が不足で中々思うように活動を進めることができませんでした。一方、日本政府の方はどうかというと、突然やってきたボートピープルの波をどうすれば良いかと戸惑い、「インドシナ難民対策連絡調整会議」が内閣に設けられ

る1979年までは難民を受入れるための具体的な計画がない様子でした。これに、日本マスコミでは、「ボートピープルは『出稼ぎ者』だ、『経済難民』だ」と消極的な記事が多かった。また、難民を受け入れた慈善団体は、それぞれ独自の方法で収容施設を運営管理し、難民に対する支援方法が一様ではなかったため、いくつかの難民収容施設で不穏が発生し、日本人および日本社会にとって評価が良くありませんでした。

この望ましくない状況が1980年代の初めまで続きました。労働団体に後援される「インドシナ難民連帯委員会（CSIR）」をはじめ、「NPO難民助ける会（AAR）」および学者、弁護士、文化人の方々が難民支援活動に参入するようになり、そのお陰で状況が大きく改善されたと私は思います。特に、労働団体の支援で1980年代初頭から実施する「愛のミルクカンパ」により、タイ、フィリピン、マレーシア等の各国にある難民キャンプに古着や本などを送ることで国際世論の対日本評価が幾分良くなったとみられます。一方、日本国内では、労働団体およびCSIRの支援により、日本各地の労働組合、大学、ユネスコ支部等で、「ボートピープルの祖国脱出理由」について説明する講演会やシンポジウム等が行われ、「難民」に対する理解が幾分深まったと考えられます。

この状況下、「日本在住ベトナム人協会（VAJ）」は、CSIRの武藤光朗会長、矢田彰事務局長をはじめ、窪田哲夫（鉄道労働組合）、東洋一（交通労連）、その他組合関係の方々の助言・支援を受けて1983年に正式に設立されました。その後、CSIRの支援を受けて東京都港区三田に事務所を開設し、主力メンバーが毎日集まって活動を推進することができるようになりました。同じビルの3階にはCSIR事務所があり、そこで矢田事務局長、多田とよ子事務局長補佐、ラオス代表のブンロム様、ベトナム代表の方々が働き、その下の2階にはVAJ事務所があり、フルタイムで活動するVAJ会員が10名ほど働いていました。毎日、昼になると3階の『食堂』に全員が集まり、矢田事務局長の自作料理で共に昼食を取りながら話し合いました。この好環境の下でVAJの活動が著しく発展し、CSIRと一緒に、日本語学習のための奨学金、小中学校入学のための奨学金、会員の入院治療際の見舞金の寄付、会員家族のメンバーが亡くなった際の香典の寄付等様々な事業を進めることができました。また、CSIRの支援で、子供向けのベトナム歴史・文化に関する教材、大人向けの日本語学習教材、辞書、日本の生活習慣に関する案内資料等を数多く発行し、定住者に配布することが出来ました。

しかし、私たちにとって、上述の財政的支援よりもCSIRの精神的支えの方がとっても貴重なものだと思います。CSIRの武藤光朗会長および矢田彰事務局長に多くのことを学びました。お二人に出会ったことは、私たちの人生にとって最も良かった出来事だと思います。

1970年代当時の日本では、「インドシナ難民は迷惑なものであり、日本は受け入れる必要がない」と考える人が少なくありませんでした。一例ではありますが、1985年11月11日付の朝日新聞夕刊「ルポ'85」が、ベトナムから脱出した難民を「出稼ぎ難民」と報道し、「国際的な批判を恐れてのこととはいえ、また、インドシナ難民に限っての措置とはいえ、純『出稼ぎ難民』を気安く受け入れ、言葉と技能の習得、職場の斡旋、生活資金の貸与等と、至れり尽くせりの世話をする国は今や日本のほ

かに無い」と決めつけました。

しかし、武藤先生はこの報道を次の通り真正面で批判してくれました。「共産化した祖国の全体主義支配の非人間的抑圧を嫌い、自由と人権の保障を求めて命かけて日本に脱出してきたインドシナ難民の人たちが、それぞれ独立自尊の自由な人間として助け合い、その連帯の輪を日本人が包んで助けていく。そして、その交流の中で、自由と人権の尊さについて、インドシナ難民の貴重な歴史的体験から、日本人も教訓を汲み取っていくことが重要だと考えている」。武藤先生のお言葉を基にして矢田事務局長は、大きな横幕に太い毛筆で「難民の人達がもってきた自由と人権のメッセージを生かしていきたい」と書いて自分のデスクの後ろの壁に飾っていました。私たちは毎日、この横幕を見て、日本で生活していること、自分が歩んでいる道、行っている活動には意義があることだなど自信をもつようになり、誇りをもって正々堂々に「自由・人権の尊さ」について周りの日本人に伝えようと思うようになりました。

武藤先生と矢田事務局長が他界になってから二十数年が経った今日ですが、お二人が残してくれた教えは私たちの記憶に新鮮です。武藤先生は「自由・人権の尊さ」、「日本語は日本社会の入口」、矢田局長は「友愛の精神」、「運動と活動の違い」、「法を守り、法に守られること」、「権利と責任」等々、貴重な教えばかりでした。40年経った今になっても、私たちはお二人の教えを日常生活に活かしながら、在日ベトナム人の若者達に伝えることに努力し続けています。

V A J 協会が発足した1983年頃、在日ベトナム人コミュニティの人数は5,000人程度であり、ほとんどはベトナム人留学生と定住難民およびその家族でした。しかし、今日の状況が完全に変わり、昨年、2020年12月現在、これが450,000人に急増しました(定住者に加えて、最近来日した留学生65,600人、技能実習生218,200人含む。法務省ウェブサイト<http://www.moj.go.jp/>)。今後は、日本社会の老齢化が続き、その結果として外国からの若い労働力を取り入れることが続くと、在日ベトナム人コミュニティはますます大きくなると予想されます。

コミュニティが大きくなると新たな問題が発生します。在日ベトナム人による犯罪が最近急増していることが毎日ほど報道され、日本政府はもちろん、V A J 協会もこの問題をどう対処すればよいか真剣に考えています。犯罪者を摘発すると処罰したり、刑務所に入れたり、強制送還したりするだけではこの問題を根本的に解決することができないことは明らかであり、それに加えて、適正な教育・指導も必要と考えられます。日本語や法律、日常生活習慣等についての教育・指導の他に、40年前に労働団体およびC S I Rが「定住難民」に伝えた理念である「連帯」、「共済」、「友愛」、「法を守り、法に守られ」、「自由・人権の尊さ」、「権利と責任」等々について留学生と技能実習生に広くおよび確実に教育・指導することも必要ではないかと思っています。

V A J 協会は、「日本で善良な生活を行い、日本人諸団体と協力し、日本社会の秩序、平和、発展へ貢献すること」を設立目的の一つとしており、今後とも在日ベトナム人コミュニティを良い方向へ導くために努力し続ける所存ですので、C S A の皆様に相変わらずご指導ご支援程、宜しくお願い申し上げます。

C S A の益々のご発展をお祈り申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。

発足からの歩み

『アジア連帯委員会』の歴史は、ベトナム戦争の終結と軌を一にして発生したインドシナ難民の救援をめざして1981年に結成した『インドシナ難民共済委員会』に端を発する。同委員会はその後、内外の情勢変化を背景に『インドシナ難民連帯委員会』『インドシナ難民およびアジアの恵まれない人々と連帯する委員会』そして『アジア連帯委員会』へと名称を変えながら、40年間に亘ってインドシナ難民やアジアの恵まれない人々を救援する運動を続けてきた。

組織発足当初から30年間の歩みは、2001年刊行「連帯の20年」誌および2012年刊行「連帯の30年」誌にとりまとめたが、40年の節目を迎えた本年、新たにその後の10年間の活動を「連帯の40年」として記録することになった。

1. 組織の変遷

インドシナ難民の増大に伴って、多くの民間団体が支援活動を行っていた1981年、労働団体の同盟（全日本労働総同盟）が具体的な活動に乗り出した。同盟は、タイにあるラオス難民キャンプの支援に取り組む「インドシナ難民救援センター」に、愛のミルクカンパから2,000万円と500トンの中古衣類を寄せて運動を本格化させ、同年『インドシナ難民共済委員会』を結成するとともに全面的にバックアップした。

日本に定住する難民の自立促進に大きな役割を担う同委員会は、事務局体制を確立し活動資金を確保するため、1983年に救援センターの組織と活動を包含して『インドシナ難民連帯委員会（CSIR）』と名称を改め活動を強化した。

また、同盟からの支援は、1987年の同盟解散後、友愛会議を経て連合（日本労働組合総連合会）に引き継がれている。

1990年代に入るとインドシナの状況が好転し、難民の祖国帰還が始まった。この状況を受けてCSIRは、帰還難民の祖国の復興や、広くアジアの進歩に役割を果たすべきだとして、1993年には『インドシナ難民およびアジアの恵まれない人々と連帯する委員会（CSIRA）』に、そして1996年には『アジア連帯委員会（CSA）』に名称を変更し、運動を発展させて今日に至っている。

1975年(昭和50)



サイゴン陥落後、社会主義体制下で迫害を受ける恐れのある階層や新体制に強い不安を持つベトナム人がボートピープルとなって国外へ脱出した。



ラオスではラオス人民共和国の樹立後、当初は高地少数民族のモン族1万人が、続いて低地ラオ族がメコン川を越えてタイ国へ逃れた。

1981年(昭和56)

5月11日 アグネス・チャンと唄おう!!
“難民を救うチャリティーショー”を成功させよう!!
インドシナ難民共済委員会設立披露パーティー
昭和56年4月16日



4月16日、サンケイホールでアジア連帯委員会の前身インドシナ難民共済委員会の発足総会開催。中央は武藤会長、左どなりはアグネスチャンさん。

2. 活動の概要

C S I R時代に取り組んだ主な活動は、日本で生活するベトナム・ラオス・カンボジア3国難民の自立に対する助力と、タイにある難民キャンプや同国の生活困窮者への支援であった。日本定住難民への援助は、日本語習得のため日本語学校入学奨学金制度の創設や「日本語を話す教室」の開講、各種慶弔や医療見舞金の給付、生活相談業務などを実施、ベトナムとラオスの歴史書を作って難民会員に配布した。これらの事業は日本在住ベトナム人協会、在日ラオス人協会と連携しながら進められたが、両協会が自主運営(自立化)することになった際には、積極的に協力・援助を行った。

在タイ難民キャンプ等への支援は、救援衣類を送る運動を中心に、お寺の建立、青年学級学舎の建設、井戸掘削、医療品や毛布・学用品・通学服の贈呈など多岐にわたった。

また、ベトナム・ラオス・カンボジア語の教科書を作り、タイのキャンプのみならず、国連難民高等弁務官の要請を受けてタイ以外の国にある難民キャンプや、カンボジア教育省にも寄贈するなど、活動は幅広く進められた。タイの恵まれない人々へは、通学用自転車、文房具、眼鏡なども贈り、訪タイ救援チームの派遣は19次に及んだ。

一方、夏の山中湖畔でベトナム・ラオス難民によるジャンボリー(1983年)を開催し、難民同士の交流促進に向けた企画も実施した。

C S I R Aとなってからの事業は、タイへの支援を継続しながらも、難民が帰還した祖国の復興やアジアの開発途上国との連帯、とりわけ「教育と医療」に主眼を置き、ラオスでの小・中学校建設や衣類配布などに拡大して展開されC S Aへと継承された。

C S Aとなって以降、これまでの救援衣料を送る事業に注力するとともに、ラオスの教育環境改善に努力した。ラオスでの教育支援事業は、小学校の建設や遠隔地高校生支援などが中心である。

1995年から現在までに建設し寄贈した小学校は24校(中学校1校を含む)である。この中には、会員組織が単独で資金を提供してC S Aを通じ建設・寄贈した小学校もある。そして寄贈後は、事業監査団などの派遣により点検と補修を行いフォローしている。

また、2003年からは「ラオス初等教育改善総合事業」として、ハード・ソフト両面を組み合わせながら総合的に対処し、教科書や教師の指導書作成への支援なども行った。

遠隔地高校生支援事業は、2002年にサンティパーブ高校敷地内に寮を建設してスタートした。ここには山岳地帯の少数民族の子弟や遠距離で通学ができない者、貧困のため進学が困難な者など、優秀な成績を修めながらも高校で学ぶ機会に恵まれなかった生徒達が入寮してきた。卒寮生は、総じて優秀な成績を収め将来の国のリーダーとして巣立っている。

これらC S Aの努力は、ラオス国・県そして地元村民などからも高く評価され、2002年には同国政府の開発勲章を受章した。

3. 地道にニーズに応じて

これまでの運動は、難民が関わる団体はもとより、国連難民高等弁務官事務所や関係国政府と十分協議して、お仕着せや人任せにせず、地道に真のニーズに応じて実践してきた。運動を支えたのは、インドシナ難民共済委員会からCSAに至る会の目的・精神に賛同した多くの個人や、労働組合・企業を始めとする各種の会員団体である。そのうち同盟－友愛会議－連合へと続くカンパ金は、1982年から今日までの間9億円強に及び、救援衣類を送る運動で輸送した衣類は約4,500トンに達している。

その功績が認められ、日本の総理大臣や外務大臣の表彰を始め、タイ首相による表彰や国連難民高等弁務官から感謝状を受けるなど、内外から高い評価を得ている。



この10年間（2011年度以降）の活動

2012年に創立30周年を祝ってから10年の間、CSAは、アジアの貧しい人々のために救援衣類を送る運動を充実させつつ、ラオスでの教育支援に力を注ぎ、日本定住者団体との交流を続けながら今日を迎えた。

後述するが、ラオスでの教育支援事業は、小学校の建設（中学校1校も含む）や遠隔地高校生支援などが中心である。

1. 救援衣類を送る運動

<取り組みの概要>

1981年から取り組んでいる救援衣類を送る運動は、タイの難民キャンプや生活困窮者への提供から、インドシナ諸国を中心としたアジアの貧困や自然災害に苦しむ人々を対象に変化し拡大しながら続けられ、回を重ねていまや36次となる。救援衣類は、都会と農村の貧富の差が大きいタイと最貧国のラオスを中心に、2011年にはカンボジアの農村地帯にも送付した。

この運動を展開するに当たっては、関係国政府との打ち合わせに基づき、真に衣類を必要としている人々に確実に届けられることを検証しながら進めてきた。

タイにおいては、社会開発福祉省からの要請を受け、老人・児童・障害者の福祉施設、定住自助や山岳民族開発センター、生活困窮者、水害被災者などに広く提供され感謝されている。

ラオスでは保健省からの支援要請を受け、寒冷地や貧困地域の人々、平地定着山岳民族、洪水被災者などに贈られ感謝されている。

<具体的な取り組み>

毎年、タイ・ラオス両国政府からの要請を受け、日本国内において、外務省後援、連合協賛の活動として取り組んできた。

取り組みにあたっては、団体会員に「取り組み要請文」「チラシ」「CSAシール」「現地語内容シール」を送付するとともに、ホームページに掲載し、ニュースで詳細な内容を掲載した。さらに、支援団体や個人会員、支援者に案内文とチラシを送付した。

しかし、2020・2021年は、世界的な新型コロナウイルス蔓延の影響を受け取り組みの先送りを決断せざるを得なかったことは残念な限りであった。

現地においては、毎年、ワーキング・スタディ・ツアーなどの際に、保管倉庫の状況を視察するとともに、送付衣類を必要としている人々に確実に配布されていることを確認してきた。また、現地からの要請事項などを把握し次年度以降への反映を図ってきた。近年では、男性衣類・冬物衣類・毛布などが不足しているとの要請を受け、支援団体をお願いしている。

2018年にはラオス南部アタップー県の水力発電所ダム決壊にともなう大洪水被害者約6,000人に救援衣類500箱を届けたことに対して、ラオス政府より感謝の意が伝えられた。

また、各団体における取組状況など報告を求め、必要に応じてアンケート調査やヒアリングを実施して活動の充実を図ってきた。

直近では、2018年、2019年にラオス向けの輸送遅れに起因する輸送費増加の問題が発生し、改善に向けた取り組みを実施してきた。

この運動の10年間の実績を<資料1>に示す。

2. ラオスの小学校建設・補修活動

<取り組みの概要>

ラオスへの帰還難民支援という視点から1995年に始められた学校建設事業では、現在までに建設し寄贈した小学校（中学校1校を含む）は24校を数える。

このなかには、セントラル硝子労組（8番目および16番目校）、J P 労組九州地本（13番目校）、同東京地本（14番目校）、カネボウ労組（23番目校）、基幹労連（24番目校）など会員団体が単独で資金を提供しC S Aを通じて建設・寄贈した小学校もある。そして、寄贈後も、事業監査団などの派遣を通して点検し補修するなどフォローしている。また、学校が建ったことによって村の人口が増える現象や、一部の学校では維持管理を村民の協力を得て行うなど変化も見られるが、まだ課題も多い。

しかし、ラオスではいまだに学校数は大幅に不足し、教科書も1人1冊行き渡っていない。また、教員数も足りず、加えてその質の向上という問題も抱えている。

そのようななかで、寄贈校のほとんどが恵まれない離村に建設され、併せて衣類や文房具・教材・運動用品を提供し、さらには教科書の作成にも一役買うなど、その活動に寄せられる感謝と期待は大きい。

劣悪な環境下にあるラオスの子供達に教育の場を提供することが、我が国との友好関係の強化や、ラオスのみならずアジア全体の平和と発展に繋がることは言うまでもない。

しかし、昨今のC S Aを取り巻く状況は、各種支援に必要な財源の不足など厳しさを増している。今後の支援のあり方を探りながら、運動を継続して行くことが重要になっている。

<具体的な取り組み>

◇ 新たな小学校建設・寄贈

基幹労連より結成10周年記念事業として新たな小学校が寄贈されることとなり、候補地2ヶ所の調査後に、ビエンチャン県フウェン郡ファサン村が建設地として選択され、2013年7月26日に調印式が行われた。

2014年5月21日(水)、完成したC S Aとして24番目校となるファサン村小学校の引き渡し式を行った。日本からは、寄贈組織である基幹労連の役員や組合員66名、C S A会長・事務局長が、ラオス側は教育省、県と郡の代表、建設会社代表、小学校関係者、小学生ら約500名が出席した。

◇ 既設校の点検補修活動

ワーキング・スタディ・ツアーおよび支援団体との支援先視察などの機会を通じて、既設校の現状を確認するとともに、現地からの要請を踏まえて補修活動を継続した。

活動の概要は<資料2>のとおり。

3. サンティパープ高校生寮支援

<取り組みの概要>

かつて難民であった人々が多く住むラオス北部8県では、貧しさゆえまたは高校が近隣にないため進学を断念せざるを得ない優秀な生徒たちが多く存在していた。

C S Aは、このような実態を踏まえて2002年にルアンプラバン県のサンティパープ高校敷地内に寮を建設し寄贈するとともに、そこでの生活と学業を支援することにより、貧困などの事情によって進学が困難な生徒が高等教育を受けられるように支援してきた。

ここには山岳地帯の少数民族の子弟、遠距離で通学ができない者、貧困のため進学が困難な者など、優秀な成績を修めながらも高校で学ぶ機会に恵まれなかった生徒達が入寮する。彼等は野菜の栽培や鶏の飼育なども行い自立に向かって努力しながら、勉学に励んでいる。

現在(2020年12月時点)の寮生は90名、これまでの卒業生は480名に達し、総じて優秀な成績で日本への国費留学も果たすなど国を支えるリーダーとして成長している。

ラオス政府教育スポーツ省とは3年ごとに本高校生寮に関わる契約更新を行っている。

<具体的な取り組み>

◇ 卒寮記念品贈呈式・成績優秀者表彰

C S Aは、毎年5月末の卒寮式に出席し、祝辞を述べるとともに卒寮生に記念品を授与し、成績優秀者にはお祝いの品を手渡ししてきた。

しかし、2020・2021年は、新型コロナウイルスの世界的拡散により出席が不可能となったため、祝辞および卒寮生への記念品と成績優秀者への祝い品を送付した。さらに、寮から要請があったマスクと体温計をビエンチャンで調達し届けた。

◇ 日本への留学生激励

サンティパープ高校からラオス国立大学に進学後、留学試験に合格し、国費留学生として来日した卒寮生は多く、毎年、日本国内で交流会を開催し激励してきた。

◇ 寮の訪問と建物・設備の点検

毎年のワーキング・スタディ・ツアーで現地を訪問した際に、団員全員と寮生及び卒寮生との交流を行ってきた。

また、建物や設備に関わる現地の要請を踏まえ点検・確認し修繕を図ってきた。

◇ ルアンプラバン県教育局との意見交換

現地を訪問した際に、ルアンプラバン県教育局との意見交換を適宜行ってきた。2018年に訪問した際には局長から「2002年に寮を寄贈いただいてから、国内統一試験で1位になる寮生が出るようになり、卒寮後は大学へ進学したり留学したりして、公務員や国営企業で働く等、国を担っている人が多い。寮があるので貧しい家庭の子どもでも教育の機会を得られるので大変感謝している。今後も支援をお願いしたい」との発言があった。

ここに卒寮生Yeng Her君（第2回生）から感謝の言葉が寄せられているので紹介する。



アジア連帯委員会（CSA）創立40年にあたりサンティパープ高校CSA寮卒寮生でラオス留学生として心よりのお礼と引き続いてのご支援に対し感謝申し上げます。CSAがサンティパープ高校寮を建設して頂き生活面までご支援いただいたおかげで今日の私があるといっても過言ではありません。CSA、連合の皆様方が私達の為にずっと今日まで継続して温かいサポートして頂いたことに改めてありがとうございます。CSAのおかげで、先輩・後輩達は日本をはじめベトナム・中国・韓国・フランス等に留学している人達がたくさんいます。そして卒業後、留学先で就職したり、ラオスに帰り活躍しています。貴重なCSA寮での経験、異国での11年間の日常生活で多くのことを学ぶことができました。私は日本企業に就職して2019年よりラオスに居ますが少しでも日本とラオスの架け橋となるように努力していきたいと思えます。アジア連帯委員会（CSA）創立40年に向けて、今後のご活躍とますますのご発展を心から祈念し、あわせてサンティパープ高校・CSA寮の卒業寮生の先輩として心より感謝申し上げます。

（2回生 Yeng Her）

4. 日本定住者団体等との交流

<取り組みの概要>

日本定住者の団体である「日本在住ベトナム人協会」および「在日本ラオス協会」は、1991年に独立事務所を開設して自立の道を歩んでいるが、CSAはその後も両協会との交流を続けてきた。両協会の代表者はCSAの評議員に名を連ねている。

協会が主催して開催される各種行事には、会長や事務局長等が参加して激励挨拶し、協会幹部との意見交換を行うなど連携を強めてきた。

ラオスでは2009年から新年を祝う会に、駐日ラオス大使館が共催する祝賀会も開かれるようになり、この年からCSA総会にラオス大使館代表が出席し挨拶されている。

<具体的な取り組み>

日本国内で開催された以下の毎年行事および周年行事に参加し交流を深めてきた。

◇ ラオス

在日本ラオス協会主催「ラオス新年祝賀会」

「文化会館設立10周年記念祝賀会（2012年）」

駐日ラオス大使館主催「ラオス新年祝賀会」、「ラオス建国記念祝賀会」

駐日ラオス大使館等が主催「ラオスフェスティバル」「日本ラオス外交関係樹立60周年記念式典（2014年）」

◇ ベトナム

日本在住ベトナム人協会主催「ベトナム建国記念行事」

◇ カンボジア

日本在住カンボジアコミュニティ主催「日本カンボジア友好60周年祝賀会（2013年）」「カンボジア正月行事（4月）」

駐日カンボジア大使館・在日カンボジアコミュニティ共催

「カンボジア・フェスティバル」

◇ その他

アジア福祉教育財団主催「日本定住難民とのつどい」

5. 事業監査・視察団の派遣

<取り組みの概要>

従来タイやラオスの実情を把握するため個別に派遣していた代表団を、タイ・ラオスを訪問するワーキング・スタディ・ツアー（WSTと略す）として再編し2005年から毎年実施している。

WSTは、中古衣類を必要とする現地の状況の把握と、CSAが寄贈・建設した小学校の点検視察を通じ、CSAの事業概要の認知を図るとともに今後の支援活動のあり方の検討に資するため、支援団体の代表者とCSA事務局で実施している。

この機会を通じて、会員団体からの参加者は、救援衣類の両国での状況把握や学校建設事業等の現地での実態にふれ、CSA運動の意義を再認識するきっかけになっている。

<具体的な取り組み>

W S Tでの訪問時には、担当省庁であるラオス保健省（救援衣類）、ラオス教育スポーツ省）、タイ社会開発福祉省（救援衣類）を訪問するとともに、ラオス・ビエンチャンの保健省医療倉庫、タイ・バンコクの社会開発福祉省倉庫で送った救援衣類の保管状況と配布状況を確認した。

サンティパーブ高校生寮（ラオス・ルアンプラバン市内）も毎回訪問し交流してきた。また、両国訪問時には、日本国大使館を表敬訪問した。さらに、W S Tとは別に必要に応じC S A事務局が現地を訪問し、現地の要望を把握するとともにその実態把握に努め、C S Aの活動にフィードバックしてきた。

毎年のW S T概要とその際に訪問したC S A建設寄贈の小学校を<資料3>に示す。

6. 募金活動

C S Aの活動を支えるために、毎年多くの団体・個人方々から「救援衣類輸送募金」「小学校建設・補修募金」「高校生支援募金」にご協力いただいた。

合わせて、メーデー等での募金にご協力いただいた。

詳細は<資料4>に示す。

7. 連合および会員団体との連携強化

(1) 連合との連携

C S Aの運動は連合の支援を抜きにして語ることはできない。C S A会員団体の中核をなすのは、連合とその傘下組合である。各労組が組合員へのC S Aの啓発に取り組み、学校建設、救援衣類の提供、各種募金の呼びかけ、ラオス・タイの現地視察など運動を下支えしている。また、連合から毎年1,300万円の支援金を受け、活動を継続している。

C S Aの活動を支える中心的な資金となっている連合愛のカンパからの助成金については、毎年3月に申請し、必要に応じC S Aの歴史・活動実績などのヒアリングに応じ9月に決定を受けている。

毎年春に開催される連合メーデー中央大会には、C S Aとして出展し「活動パネル展示」「活動募金の呼びかけ」「ラオスの手工芸品やラオスビールの寄付販売」を行った。C S Aテントには支援団体の役職員やO B・支援者・一般参加者等多くの方に来場いただきご協力いただいている。しかし、2020・2021年は、新型コロナウイルスの感染防止により代々木公園での式典・出展等が中止となった為、C S Aの出展・募金も中止した。

毎年8月に開催される「連合平和ヒロシマ集会」「連合ナガサキ集会」には後援団体の一つに名を連ね協力している。

(2) 会員組織との連携

◇ カネボウ労働組合との連携

2012年12月9日(日)から13日(木)にかけて、カネボウ労組が2011年にCSAを通じてラオスに寄贈したビエンチャン県カシ郡パチャオ村小学校の一年目点検を、カネボウ労組3名とCSA 1名の4名で実施した。

2018年5月26日(土)から6月1日(金)にかけて、パチャオ村小学校の視察を、カネボウ労組8名とCSA 1名の9名で実施した。

同じく2019年5月25日(土)から6月1日(土)にかけて、パチャオ村小学校の視察を、カネボウ労組3名とCSA 1名の4名で実施した。

◇ 基幹労連との連携

基幹労連からラオスに小学校を寄贈したいとの意向を受け、候補地の選定、政府との調印、建設、引き渡し(2014年5月21日)など連携して対応した。詳細は、小学校建設の項を参照のこと。

2015年5月19日(火)に、ファサン村小学校の1年目点検を、基幹労連2名とCSA 1名で実施した。その際に、校長先生から井戸の新設の要望に基づき、基幹労連の支援で井戸の新設を行ない、2015年9月14日に完工した。

◇ JP労組東京地方本部との連携

2015年2月21日(土)から27日(金)にかけて、JP労組九州がCSAを通じて寄贈したコアティヌン小学校とJP労組東京が寄贈したシェンレーナ小学校への訪問・視察をJP労組東京5名とCSA 1名の6名で実施した。

2019年2月23日(土)から3月1日(金)にかけて、シェンレーナ村小学校への訪問・視察をJP労組東京5名とCSA 1名の6名で実施した。

◇ セントラル硝子労働組合との連携

2017年5月21日(日)から26日(金)にかけて、セントラル硝子労組がCSAを通じて寄贈したナコン村小学校とホアナ村小学校への訪問・視察をセントラル硝子労組7名とCSA 1名の8名で実施した。

◇ 連合茨城との連携

連合茨城には、救援衣類事業で毎年多大なご協力を得ている。その連合茨城が30周年事業として救援衣類タイ視察団を派遣することとなり、CSAも協力し同行した。

視察団は、2019年11月26日(火)から30日(土)の期間で、連合茨城17名とCSA 1名の18名で実施した。

◇ その他の連携

会員組織からの要請にこたえて、研修会や内部会議に出向き、CSAの歴史や活動内容について講演し、更なる支援を要請した。

- ・2015年4月22日(水) コモディイダ労組 セミナー 約100名
- ・2018年5月10日(木) キャタピラージャパン労組 セミナー 約40名
- ・2018年11月15日(木) 連合茨城 役員研修 約50名
- ・2020年2月18日(木) UAゼンセン 社会貢献委員会 16名

8. 支援組織の拡大

CSAの活動を支援していただける団体会員および個人会員の拡大に努めてきた。直近（2020年12月末時点）では、71団体会員、46個人会員となっている。詳細は<資料5>に示す。

9. 広報・宣伝活動の強化

ホームページ上にCSAの活動内容をタイムリーに掲載し情報提供を充実した。また「CSAレポート」「CSAワーキングスタディーツアー報告書」を発行するとともに、その内容をホームページ上からも閲覧・ダウンロードできるようにした。

救援衣類を送る運動については「案内チラシ」「CSAシール」「現地語内容確認シール」を作成するとともに、ホームページ上から閲覧・ダウンロードできるようにした。

その他、「CSAメールニュース」を適宜発信した。

毎年開催される連合メーデー中央大会では、出展してCSA事業の写真展示、ラオスの民芸品等の販売による募金活動を行った。



救 援 衣 類 を 送 る 運 動

		第28次 (2011)	第29次 (2012)	第30次 (2013)	第31次 (2014)	第32次 (2015)
集荷期間		10/3(月)~7(金)	10/1(月)~5(金)	10/7(月)~11(金)	10/6(月)~10(金)	10/5(月)~9(金)
ラオス	コンテナ(40f)数	5本	5本	5本	5本	5本
	段ボール数	3,326箱	3,467箱	3,051箱	2,743箱	2,845箱
	東京出港日	10月11日	10月12日	10月14日	10月15日	10月12日
	現地到着日	10月24日	2012/11/初旬	11月2日	11月3日	11月4日
	輸 送 費	2,796,292円	3,348,752円	3,627,893円	3,365,015円	3,322,603円
タイ	コンテナ(40f)数	10本	9本	11本	10.5本	11本
	段ボール数	6,499箱	6,377箱	6,630箱	6,083箱	6,002箱
	東京出港日	10月16日	10月14日	10月20日	10月24日	10月15日
	現地到着日	11月16日	11月6日	11月3日	11月8日	10月29日
	輸 送 費	4,776,958円	4,510,524円	4,957,534円	4,982,851円	5,205,618円
合 計	コンテナ(40f)数	16本	14本	16本	15.5本	16本
	段ボール数	10,437箱	9,844箱	9,681箱	8,826箱	8,847箱
	集荷重量	220,713kg	141,222kg	193,620kg	128,600kg	165,675kg
	輸 送 費	7,573,250円	7,859,276円	9,005,427円	8,767,866円	8,528,221円
	輸送募金	5,454,997円	4,971,791円	5,442,223円	7,025,401円	6,664,785円
	募金額/輸送費	72.0%	63.3%	60.4%	80.1%	78.1%

		第33次 (2016)	第34次 (2017)	第35次 (2018)	第36次 (2019)
集荷期間		10/3(月)~7(金)	10/2(月)~6(金)	10/1(月)~5(金)	10/7(月)~11(金)
ラオス	コンテナ(40f)数	6本	6本	6本	6本
	段ボール数	3,206箱	3,753箱	4,033箱	3,632箱
	東京出港日	10月10日	10月8日	10月12日	10月17日
	現地到着日	11月17日	11月16日	2019年1月9日	2020年1月13日
	輸 送 費	4,076,207円	4,808,055円	8,657,411円	7,857,050円
タイ	コンテナ(40f)数	8本	8本	7本	7本
	段ボール数	4,503箱	5,103箱	4,282箱	4,582箱
	東京出港日	10月16日	10月16日	10月16日	10月23日
	現地到着日	11月13日	11月11日	11月30日	11月23日
	輸 送 費	3,799,648円	4,314,261円	5,477,865円	3,876,195円
合 計	コンテナ(40f)数	14本	14本	13本	13本
	段ボール数	7,709箱	8,856箱	8,315箱	8,214箱
	集荷重量	65,901kg	81,490kg	92,780kg	82,790kg
	輸 送 費	7,875,855円	9,122,316円	14,135,276円	11,733,245円
	輸送募金	6,823,361円	6,534,461円	6,431,631円	7,166,168円
	募金額/輸送費	86.6%	71.6%	45.5%	61.1%

2013-14年度の輸送費合計には検品費用42万円を含む。

第37次 (2020) の救援衣類を送る運動は、新型コロナウイルス蔓延のため翌年に延期した。

寄贈した小学校の点検補修活動概要

○内の数値は何番目の寄贈校かを示す

年度	場 所	内 容
2011	ナマイ村小学校②	1年目点検 全て良好を確認
	クッサンバット村小学校①	天井と屋根の修理
2012	パチャオ村小学校③	1年目点検 全て良好を確認
	クッサンバット村小学校①	屋根と天井の修理、シロアリ対策実施を確認
	ホンガム村小学校②	屋根と天井の修理用資材を提供し実施確認
	ナカン村小学校⑤	点検 修理が必要なことを確認
	コアティヌン小学校⑬	点検 校舎問題なしを確認
	コンケオ小学校③	点検 修理が必要なことを確認
2013	ソムサバット小学校④	点検
	トンナミ小学校⑥	点検 校舎の老朽化、屋根修理の必要性を確認
	ホンガム小学校②	点検
2014	ナカン村小学校⑤	点検 廊下天井裏の剥がれ、便器1台破損を確認
	ファサン村小学校⑭	1年目点検 井戸新設（基幹労連が支援）
	シェンレーナ小学校⑭	井戸と屋根・天井の修理（J P 労組東京が支援）
2015	コンケオ小学校③	天井と屋根の修理資材費を送金
	ソムサバット小学校④	屋根と天井の修理、外壁塗装
	ボンサイ村小学校⑦	点検
	シェンレーナ小学校⑭	井戸と屋根・天井の修理状況を確認
	ファサン村小学校⑭	井戸新設工事終了の報告
2016	コンケオ村小学校③	屋根と天井修理 確認
	ターディンタイ村小学校⑲	点検
	ナカン村小学校⑤	屋根と天井修理資材費送金
	ナコン村小学校⑯	点検
	ホアナ村小学校⑧	点検 補修資材費送金（セントラル硝子労組が支援）
2017	ファサン村小学校⑭	点検
	ナカン村小学校⑤	屋根と天井修理後確認
	ホアナ村小学校⑧	補修後確認
	パチャオ村小学校③	点検 雨漏り、壁の汚染、トイレ破損確認 補修資材費送金（カネボウ労組が支援）
	トンナミ村小学校⑥	現地コーディネーター補修資材費調整
2018	ソムサバット村小学校④	点検
	トンナミ村小学校⑥	補修後確認
	シェンレーナ村小学校⑭	井戸修理代送金（J P 労組東京が支援）
	コアティヌン村小学校⑬	点検
	パチャオ村小学校③	屋根と天井の修理資金送金（カネボウ労組が支援）
2019	ナラオ村小学校⑪	視察時に建物改修の要請あり
	クッサンバット村小学校①	視察時に外壁塗装支援要請あり 塗料・資材費を送金
	シェンレーナ村小学校⑭	井戸修理完了

ワーキングスタディツアー（WST）概要

◇ 2012年1月7日(日)～14日(日)

① 参加者10名

氏名	組織名・役職名
橋本 裕信	連合 総合組織局 連帯活動局 部員
石川 浩規	UIゼンセン同盟 とりせん労働組合 中央執行副委員長
西嶋 章乃	UIゼンセン同盟 ホークスタウンユニオン 執行副委員長
西村 正雄	UIゼンセン同盟 大阪ガスカスタマーリレーションズ労組 執行委員長
村山 長稔	基幹労連 JFEスチール 知多労働組合 執行委員
佐崎 吉宏	基幹労連 三菱重工労働組合 中央執行委員
三輪 明洋	基幹労連 IHI労働組合連合会 組織対策部長
山中 貴雄	基幹労連 三井造船労働組合連合会 東京地方支部 支部書記長
山崎 友美	JAM リケン労働組合 支部執行委員
渡邊ひな子	アジア連帯委員会 事務局長

② 訪問小学校

ホンガム村小学校（2番目校）、ターディンタイ村小学校（19番目校）、
ホアナ村小学校（8番目校）

◇ 2013年1月26日(日)～2月2日(日)

① 参加者11名

氏名	組織名・役職名
加藤 栄二	日本労働組合総連合会 連帯活動局部長
縄手 茉莉	UAゼンセン グンゼ労働組合 常任中央執行委員
並木 良枝	UAゼンセン コモディ・イイダ労働組合 特別中央執行委員
駒形 文人	UAゼンセン すかいらーくグループ労働組合連合会 副事務局長
萩原 健	基幹労連 三菱重工労働組合 中央執行委員
藤井 馨	基幹労連 IHI労働組合連合会・堺支部 書記長
末武研一郎	基幹労連 JFEスチール労連・千葉労組 執行委員
西巻 孝之	JAM 組織・調査グループ 副グループ長
田倉 正司	印刷労連 中央執行委員長代行
渡邊ひな子	アジア連帯委員会 事務局長
山岡みゆき	アジア連帯委員会 事務局次長

② 訪問小学校

クッサンバット村小学校（1番目校）、ターフウア村小学校（17番目校）、
ムアンソン村小学校（18番目校）

◇ 2014年1月18日(土)～25日(土)

① 参加者8名

氏名	組織名・役職名
鈴木 啓子	UAゼンセン ダイソー労働組合 尼崎支部執行委員
藤沼 伸一	UAゼンセン アルペン労働組合 中央執行委員長
壹岐 健	UAゼンセン イオンディライト労働組合 中央執行副委員長
田中 英二	UAゼンセン ソラストユニオン 中央執行書記長
三島 慎太	基幹労連 三菱重工労働組合 中央執行委員
酒向 真澄	基幹労連 IHI労働組合連合会 組織対策部長
濱本 将矢	基幹労連 JFEスチール福山労働組合 地域対策部長
山岡みゆき	アジア連帯委員会 事務局長

② 訪問小学校

ソムサバット村小学校(4番目校)、トンナミ村小学校(6番目校)

◇ 2015年1月17日(土)～24日(土)

① 参加者9名

氏名	組織名・役職名
若月 利之	連合 総合組織局連帯活動局 部長
可野 淳二	UAゼンセン アシックス労働組合 組合員
黒田 誠	UAゼンセン カスミユニオン 中央執行副書記長
戸梶 貴明	UAゼンセン SMBCコンシューマーファイナンス労働組合 中央執行書記長
鈴木 教子	UAゼンセン ソラストユニオン 中央執行委員
川端 茂雄	基幹労連 三菱重工労働組合 中央執行委員
柳瀬 好文	基幹労連 IHI労働組合連合会 労働対策部長
森 泰隆	基幹労連 JFEスチール京浜労働組合 執行委員
渡邊ひな子	アジア連帯委員会 副会長

② 訪問小学校

ナカン村小学校(5番目校)、ファサン村小学校(24番目校)

◇ 2016年1月16日(土)～23日(土)

① 参加者9名

氏名	組織名・役職名
松井 裕一	連合 総合組織局 連帯活動局職員
塩坂 博史	UAゼンセン サニーマート労働組合 中央執行書記長
彦坂 健太	UAゼンセン 帝人労働組合 岩国支部青年女性委員会部長
吉村 隆幸	UAゼンセン ポケットカードユニオン 中央執行委員長
佐山 顯	JAM タダノ労働組合 執行委員
甲斐 久資	基幹労連 三菱重工労働組合 中央執行委員
祐延 和広	基幹労連 IHI労働組合連合会相生支部 執行委員
宮本 亮	基幹労連 JFEスチール労働組合連合会 中央執行委員
山岡みゆき	アジア連帯委員会 事務局長

② 訪問小学校

コンケオ村小学校(第3番目校)、ポンサイ村小学校(第7番目校)

◇ 2017年1月14日(土)～21日(土)

① 参加者9名

氏名	組織名・役職名
青柳 久子	連合 総合組織局 連帯活動局 シニアスタッフ
中村 健志	UAゼンセン 三越伊勢丹グループ労働組合 北海道統括支部 札幌丸井三越支部 執行委員
名頭蘭由希雄	UAゼンセン レナウン労働組合 組合長
泉 利雄	UAゼンセン アンダーツリー東京ユニオン 中央執行委員長
浅山 哲也	UAゼンセン 教育・社会運動局 副部長
和田 諭	基幹労連 三菱重工労働組合 中央執行委員
吉野 雅彦	基幹労連 IHI労働組合連合会武蔵支部 執行委員
奥信 明繁	基幹労連 JFEスチール福山労働組合 地域対策部長
山岡みゆき	アジア連帯委員会 事務局長

② 訪問小学校

コンケオ村小学校（3番目校）、ターディンタイ村小学校（19番目校）

◇ 2018年1月13日(土)～20日(土)

① 参加者13名

氏名	組織名・役職名
石田 輝正	連合 総合組織局 連帯活動局長
高林 希和	UAゼンセン カネボウ労働組合支部特別執行委員
米田 隆	UAゼンセン トーカイ労働組合 中央執行委員長
松末 祥司	UAゼンセン 万代ユニオン 副委員長
井上さとみ	JAM 電算印刷労働組合 青婦厚生部幹事
森本 哲平	基幹労連 三菱重工グループ労連 中央執行委員
栗村 武志	基幹労連 IHI労連 相馬支部書記長
仲 政幸	基幹労連 住友重機械労連 横須賀地方本部書記長
西山 英二	基幹労連 JFEスチール知多労働組合 執行委員
椎野 幸作	基幹労連 中央執行委員
田所 伸吾	JEC連合 セントラル硝子労組 松阪支部長
鈴木 隆	アジア連帯委員会 事務局次長
山岡みゆき	アジア連帯委員会 事務局長

② 訪問小学校

ファサン村小学校（24番目校）、ナカン村小学校（5番目校）、
ホアナ村小学校（8番目校）

◇ 2019年1月19日(土)～26日(土)

① 参加者8名

氏名	組織名・役職名
森 啓記	連合 総合組織局 連帯活動局長
山崎 誠也	UAゼンセン 大阪ガス労働組合 大阪支部 副執行委員長
山本 雅士	UAゼンセン カイハラ労働組合 上下・三和支部 副支部長
伊津田秀美	UAゼンセン オールサンデーユニオン 中央執行副書記長
本岡 諒一	JAM 兵庫東地区協議会担当オルガナイザー
堀田 真吾	基幹労連 IHI労働組合連合会 組織対策部長
工藤 健弘	基幹労連 三菱重工グループ労働組合連合会 中央執行委員
鈴木 隆	アジア連帯委員会 事務局長

② 訪問小学校

ソムサバット村小学校（4番目校）、トンナミ村小学校（6番目校）

◇ 2020年1月25日(土)～2月1日(土)

① 参加者8名

氏名	組織名・役職名
山根木晴久	連合本部 総合運動推進局長
小林 孝徳	UAゼンセン 教育・社会運動局部長
吉岡 爽	UAゼンセン イオンリテールワーカーズユニオン 中央執行委員
藤井 雅実	UAゼンセン 全プリマハム労働組合 執行委員
谷口 憂也	JAM 神鋼機器工業労働組合 執行委員
薦田 弘幸	基幹労連 IHI労働組合連合会相生支部 書記長
高橋 聡	基幹労連 三菱重工グループ労働組合連合会 中央執行委員
鈴木 隆	アジア連帯委員会 事務局長

② 訪問小学校

ナラオ村小学校（11番目校）、クッサンバット村小学校（1番目校）

